

2015 年後期政策過程論

採点を終了したので、例によって講評を行う。今回の問題、第一問は「実施」について問うもの、第二問はロウイ。問題用紙に書かれた問いをまず記す。

以下のいずれか一問に答えなさい。両方に答えてもかまいませんが、できのよい方を採点対象にしますので、合わせ技の得点は期待できません。時間資源の集中をとるか危険分散をとるか、戦略は受験者にお任せします。

1. 実施（執行：implementation）と呼ばれる領域は、プレスマンとウィルダウスキー（Pressman & Wildavsky）が問題提起した際には注目を浴びたが、昨今はさほど注目されない。理論的な意味で、独立しているわけではないと思われ始めたところがその理由と考えられるが、なぜか、その点を説明せよ。また、政策過程論との関係で実施研究が理論的に独自の意味を持つとしたらどういう点が考えられるか、論じよ。
2. ロウイ（Lowi）の権力の競技場（Arenas of Power）論は、内生性批判を受けて独立変数の再定義を行うことにより、政治理論への国家の再導入に先鞭をつけた理論となったと言われている。このことを説明せよ。

追試用問題

カツェンシュタイン（P. Katzenstein）の「政策ネットワーク（policy network）」論は、日本でも政治経済学や政治過程論を専攻してきた研究者の間に支持者が多い。彼の議論にはどのような優れた点があるからだろうか。論評しなさい。

今年は追試の受験者もあった。が、どうも定期試験の問題についての解答を忘れてしまっているのが、完全に不実記載、白紙ということだ。試験というのは、問われていることに答える、これが基本。

さて、多くの人が受験した定期試験期間中の二問だが、どうやら二問目の方が答えやすいと思ったのか、そちらに答えた人が多かった。確かに実施については、僕の書いたものは見つけにくいように思う（ないわけではないのだが）。ロウイは、ま、十八番なので、こちらが与しやすいと思ったのだろう。回答者と成績の

分布は以下の通り。

2回生

| | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|------|---|----|----|----|----|------|
| ① | A+ | A | B | C | F | ② | A+ | A | B | C | F |
| | 0 | 4 | 10 | 7 | 3/24 | | 1 | 11 | 13 | 16 | 9/50 |

3回生

| | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|---|---|------|---|----|---|---|----|------|
| ① | A+ | A | B | C | F | ② | A+ | A | B | C | F |
| | 0 | 0 | 7 | 9 | 4/20 | | 2 | 8 | 8 | 12 | 6/36 |

4回生以上

| | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|---|---|-----|---|----|---|---|---|------|
| ① | A+ | A | B | C | F | ② | A+ | A | B | C | F |
| | 0 | 3 | 3 | 5 | /11 | | 1 | 4 | 3 | 3 | 1/12 |

追試の受験者は①に答えていたが、そもそもそれを問うていないので、この表には入れていない。正規の試験期間中の答案の集計である。その中で、両方に答えている答案もいくつかあったが、できがよいと思えた方を読んでいるので、上記の表は採点対象としたものの篩い分けである。一枚だけ、来てみたけど、どちらにも答えられそうにない、お手上げ、というのを正直に書いていたものがあり、これは、便宜上、①のFに繰り込んである。

一問目の解答のポイントは、①そもそも実施研究とは何を指したものであり、②最近、はやらない理由はなんであり、③それでも意義があるとするところか、という三つにそれぞれきちんと答える、ということである。インプリメンテーション・ギャップをインプリメンテーションの側から考えるというのが実施研究だが、ギャップの原因は、実は決定過程の失敗にあるのでは、という疑義などから、独立して論ずることの意義が疑われ、昨今はあまり関心を持たれなくなった。意義があるとするればアリーナ論との絡みで、決定過程と実施過程でアリーナがずれていくことや、そもそも実施過程そのものが決定過程と論理的に直結していない政策領域が発見されていくことだろう。

このあたり、3点ともきちんと書けていればA、2点は明らかに書けているが、もう一つは触れられているかどうか怪しいものがB、一つは論及できているのかな、とか、全部怪しいけれど、なんとなく問われていることは理解できていそうかな、というのがCという評価となった。

政策過程を追う時、実施まで見るのはある意味では当然だが、その実施に独自の論理・生理があるのではないかと、ここに注目するのが実施研究である。ただ「実施」という言葉を使うだけでは1点目は怪しい。理解していると採点者に示すのが答案なので、しっかり書かねばならない。ま、下手に書いて理解でき

ていないことがバレるのを避けるという配慮もいるのだが。インプリメンテーション・ギャップという語が導けていればおおむね1点目と2点目は見えていると考えてよいのだが、その書きぶりから、言葉は引いているが、中身はわかっていないと考えざるを得ない答案も多かった。3点目のアリーナ論との絡みだが、1・2点目のきちんと書けている答案はほとんど、これが書けていない。多くのB答案がそういう感じだ。何を読んで用意してきたかは理解できるが、その読んだものはアリーナ論には触れておらず、決定の無謬性を仮定すればという論旨が展開されており、ここをきちんと理解できていれば、私自身のとらえ方とは異なるが、Aにした。

アリーナ論との関連に触れた答案は1点目、2点目に対する記述が曖昧なものが多く、講義はまじめに聞いてくれたのだろうな、と思いつつ、少し私自身の伝える力のなさを感じるころもあった。そうした事情で、Aが少なく、A+どころではなく、こちらを選んだ答案は評価が相対的に下がってしまった。

実施に絡めて官僚制が、とか、中央集権が、とかが目についたが、理論に関する問いなので、これはあまり関係がない。特に集権から分権への日本的事情について長々と書いたものもあったが、全く関係がない。理論、というものがわからないのだろうな、と思った。

二問目の解答のポイントが、①ロウイの政策規定説の概説、②初期の議論が内生性批判を受けたことの説明、③再定義が国家論の復権に先鞭をつけることになったことの説明、というのはい明らかだろう。従来の政治過程論の組み立てが、過程が政策を導くというものであったのを逆転させて、政策こそが、それぞれに対応する異なる政治過程を導くという議論を行ったのだが、独立変数とした政策カテゴリーの定義が曖昧で、従属変数の政治過程の中にある人々の認識(期待)が独立変数の定義に使われているのではないかと論難され(内生性批判)、再定義において、人々の認識ではなく「国家」の認識(期待)であるとしたことで、ロウイのアリーナ論は国家論の復権につながったのである。

こういうところが3点ともきちんと書けていればA、2点は書けていそうだがというのがB、一つは書けているかな、とか、全部怪しいけれど、なんとなく全体に問われているところはわかっているかな、と思えるものをCにした。

やはり内生性の説明がむずかしく、トートロジー、サーキュレーション、いろいろ語りながら苦労して説明してくれたものが多い。コトバはあるのだが、完全に意味の取り違えをしていることが明らかなもの、コトバだけで説明が全くないものは書けているとは理解していない。ロウイの規定説について、分配、規制、再分配の詳しい記述をしてくれた答案も多かったが、そこはあまり重要ではない。問われているのは、論理的説明の構図の逆転を記すことであり、そうであれ

ば、異なる政治過程を析出する独立変数の変数値を少なくともオーディナルなものにするメルクマールへの言及が重要であることがわかるだろう。

ロウイは多元主義政治理論が利益集団自由主義を生み出してしまったことへの批判者としても知られているので、調べるとそういうところを強調する記述もないわけではないから、そういうものを見てしまったのだろうな、と思わせる答案も散見された。しかし、今回の問いは、政治過程論の理論を旋回させた理論家としてのロウイの評価を問うものであり、半可通な現実政治批判を書いてしまうというのはどういうことだろう、と行ってしまった。最近、うちの学部ではそういう「講義」が増えているのか、勉強しないで単純なノリで批判者の立場が好きな学生が増えているのか、政策科学部の原点を思い起こしてもらわないといけないのではないか、と行ってしまった。

もちろん、そういうことを書いても無視するだけで、減点しているわけではない。問われたことと関係ないことを長々と書かない、というのはきちんとした学生の常識だと思うのだが。

こちらの答案にはA+が何人かいた。2回生、■■■■■、3回生、■■■■、■■■■■、4回生、■■■■■、以上、4名である。